

図地分化と容器のメタファーに見る「自己」の概念研究（その2）

— 英語、スペイン語の異言語対照を中心に —

福 森 雅 史

3. 3. 「肉体」と「精神」という対立概念の認識

ここで一つの疑問が生じる。§ 3. 2. 2.(2)に示したように、「自己 (Self)」である「容器」は「肉体」である。このように、「肉体」を容器として考えた場合、その中に納められる内容物には「内臓」、「骨」、「筋肉」、「食べ物」、「飲み物」、「空気」… など、様々なものが考えられる。では、この self の考察に限った場合、「この容器に納められるべき内容物は何か？」というものである。

そして、この疑問を解き明かす鍵となるものが、隣接科学である「哲学」を利用した新しい視点からのアプローチである。

3. 3. 1. 「哲学」的視点からのアプローチ

「哲学」的視点からの鍵となるものが、下記(1)に見られる「心身二元論」という考え方である。

- (1) Dualism is the theory that two and only two kinds of substance exist: minds and physical objects. A mind is a purely mental, non-material or spiritual substance, and a physical object is a purely material, non-mental, spatially extended substance. It logically follows that no mind is a physical object and no physical object is a mind. A person, on the dualist account, comprises both a mind and a body, but most dualists maintain that a person is essentially his or her mind but only contingently his or her body or, to put it another way, a person is his or her mind but a person has or owns his or her body. It follows that if a person's body should cease to exist it is logically possible that that person should continue to

exist; but if a person's mind should cease to exist, then that person necessarily ceases to exist. In principle, minds may exist without bodies and bodies may exist without minds.

(心身二元論 (dualism) とは、心 (mind) と物体 (physical object) という二つの、そして二種類の実体だけが存在するという見解である。心は純粋に心的なものであり、非物質的で精神的な実体である。物体は純粋に物質的であり、非心的で、空間的な広がりを持つ実体である。そこで論理的には、心でないものは物体であり、そして物体でないものは心であるということになる。二元論主義者の説明では、人は心 (mind) と肉体 (body) の両方から成っている。しかし、二元論者の多くは、人は本質的に心そのものであり、偶然に肉体を持っているに過ぎないと主張している。別の言い方をすれば、人は心そのものであり、肉体の方は持っている、つまり所有しているということである。ここから、たとえ人の肉体が存在しなくなるとしても、論理的に人は存在し続け得るが、もし人の心が存在しなくなるとしたら、その時は、その人は必然的に存在しなくなるということになる。原理上は、心は肉体無しに存在し得るが、肉体は心無しには存在し得ないのである。)

— Priest (1991: 1) (下線・日本語訳筆者)

この考え方に基づけば、我々人間は「心」と「肉体」という二種類の実体から成っているとと言える。そして、これを § 3. 2. 1. (3) で見た「自己 (Self)」と「主体 (Subject)」に対する「容器」と「内容物」の捉え方に当てはめれば、以下(2)のようにまとめることができる。

- (2) 「自己 (Self)」 → 容 器 : 「肉体」
 「主体 (Subject)」 → 内容物 : 「心」

そして、この「心」に対応するものとしては、「魂 ([英語] soul / [スペイン語] alma)」と「精神 ([英語] spirit / [スペイン語] espíritu)」の2種類があると考えられる。

3.3.2. 「魂（[英語] soul / [スペイン語] alma）」と「精神（[英語] spirit / [スペイン語] espíritu）」

3.3.2.1. 「魂」と「肉体」との関係

「肉体」を「容器」、「魂」を「内容物」とする捉え方は、我々が通常用いている語の中にも見てとることができる。その実例の一端を以下（1）に示す。

- (1) 頭から足の先までの全体。肉体の全部。古くは、魂に対してそれを宿す身体、生命のこもらない肉体のことをいった。魂を宿した肉体はミ（身）という。つまり、カラダはミの外形の部分であった。「カラ（殻・軀）+ダ（接尾語）」からなる語といわれる。カラは、水分・生命がすっかりなくなって抜け殻となったものの意。平安時代には、蟬などが脱皮した後の抜け殻や死体などに用いられている。ナキガラ（亡骸）のカラである。植物の茎や幹、枯れ枝などの意のカラ（幹・柄）や、「枯山」「から梅雨」などの、水気のない、乾いた、実質のないの意のカラ（枯・涸）、からっぽの意のカラ（空）などと同源とされる。

カラダは漢文訓読語であるため平安時代の和文には用いられず、『源氏物語』の「からをだに、とどめて、見奉る物ならましかば」のように、代わりにカラが用いられた。一般的な語としてカラダが使われるようになったのは、中世以降である。『日葡辞書』（一六〇三年）には、時には生きた体の意にも用いるという説明がある。魂と体を区別して考えることが少なくなってきたためか。

— 『暮らしのことは 新語源辞典』(s.v. ^{からだ}体) (下線筆者)

このように、日本語「体」とは、本来は「カラ（殻・軀）+ダ（接尾語）」のことで、「古くは、魂に対してそれを宿す身体、生命のこもらない肉体のこと」を示した語であったと考えられている。このように、「魂」とは「肉体」という容器の中に納まる内容物であると考えられていたことから、以下(2)に示されるように、

- (2) 驚くこと。びっくりすること。

語構成は「タマ(魂) + ゲル(消る)」で、ゲル(ケル)はキエルが縮まったもの。江戸時代から見える語である。

一方、鎌倉時代から見える語にタマギルがあり、「びくびくする・怯える」の意で用いられたが、室町時代末ごろからは「驚く」の意にも用いられるようになった。しかし、こちらの語源は「魂切る」らしく、語源的に直接は結びつかない。

—『暮らしのことば 新語源辞典』(s.v. ^{たまげ}魂消る) (下線筆者)

あまりに驚くと、内容物である「魂」が容器である「肉体」から抜け出て、容器内部から消えてしまうと考えられていた。さらに、次の(3)-(4)に見られるように、西洋言語においても同様の例が存在する。

- (3) ラテン語 *anima* の意味は「微風；呼吸；(元素としての) 空気；(肉体に宿った) 魂」であり、それはまた、人間を含む動物が共通に持っている魂 (soul) を意味するものであった。すなわち、日本語で「一寸の虫にも五分の魂」と言うときの魂に似たものである。英語の animal (動物) はこの *anima* に由来する。*anima* に対して、男性形 *animus* は「生命；(身体に宿った) 魂；靈魂；精神；思惟；記憶力；意志；気分」という意味があり、人間だけがもつ心 (mind)、すなわち mental、spiritual、psychological なものは *animus* の働きによると考えられていた。De Rerum Natura (『万物の本性について』) という有名な哲学詩を書いた古代ローマの哲学者ルクレティウス (Lucretius) は、*animus* は胸にあり、*anima* は微少な粒子となって体中に散在していると考えた。*anima* や *animus* がぬけてしまった肉体が *corpus*、すなわち corpse (死体) である。

— 梅田 (1985: 69) (下線筆者)

- (4) またドイツ語には Leiche、または Leichnam 「死体」という形が存在するが、これも同じ「身体」(Leichnam は古高ドイツ語 *lihhamo*、*lichinamo* < **lihhinhamo*；古英語 *lic-hama*。-nam は「覆い」) に基づくものである。

— 風間 (1990: 195) (下線筆者)

このように、我々人間は、洋の東西を問わず、「肉体」は「容器」（時に「(内容物を)覆っているもの=覆い」）であり、その中には内容物である「(霊)魂」が入っていると認識していると言えるのである。さらに、「魂」が抜け出た後に残った肉体が「死体」だと見なされている点も、日本語と西洋言語に共通して見ることができる¹。このことから、下記(5)が言える。

- (5) 内容物である「魂」が容器である「肉体」から外に出ることは「死」を意味する。すなわち、「魂」とは「生命」を意味する。

このように、「魂」とは「生命」を意味すると言えるが、この「生命」とは、次の(6)の記載に見られるように、

- (6) 生物が生物として存在し得るゆえんの本源的属性として、栄養摂取・感覚・運動・成長・増殖のような生活現象から抽象される一般概念。いのち「一を尊重する」

—『広辞苑』(s.v. せい-めい **【生命】** ①) (下線筆者)

様々な「生活現象から抽象される一般概念」であると言える。そのため、「生命」それ自体は目にも見えず、手にも触れることはできない。

しかしながら、ここで、以下(7)に示す一つの疑問が生じる。

- (7) 目にも見えず、手にも触れることができないものが肉体の外に出ることが、何故「死」を意味すると考えられるようになったのか？

この疑問を解き明かすには、目にも見えず、手にも触れることはできない抽象物でさえそれを言語化して捉えようとする、人間が本質的に持つ概念化のプロセスに目を向けることが必要となる。

たとえば、下記(8)の表現において、

(8) 溢れ出す生命力

「溢れ出す」という表現は本来、物理的流動体が或る空間の中でいっぱいになって入りきれず外へこぼれ出る事象 (cf. 『広辞苑』 (s.v. あふれ・でる【溢れ出る】)) を示すことは言うまでもない。つまり、上記(8)の背景には、下記(9)の比喩のフィルターが存在していることになる。

(9) 生命は液体である ([英語] LIFE IS A FLUID / [スペイン語] LA VIDA ES UN LÍQUIDO)

このようなメタファーが人間の生命という抽象物を概念化するために機能していることは次の(10)の実例からも明らかである。

(10) Lo! some we loved, the loveliest and the best
That Time and Fate of all their Vintage prest,
Have drunk their Cup a Round or two before,
And one by one crept silently to Rest.

(聞け! 愛した者、いとしく、よき者
時と運命に美酒を絞り出され、

かれらは一、二巡りと杯を飲み干して、

ひとり、またひとり静かに安息についたのだ。)

— Lakoff and Turner (1989: 19) (日本語訳 大堀 (訳) (1994: 25) (下線筆者))

つまり、この中世ペルシアの叙情詩『ルバイヤット (Rubaiyat)』²においては、人間の肉体は「生命 (= 美酒) を入れる容器」として概念化され、「肉体」と「生命」との関係は「容器」と「内容物」との関係で認識されていることが見出される。

さらに、上記(8)および(10)の例では、「生命」という内容物を「液体」として捉えているが、「生命」という抽象物が「液体」という具象物によって認識される必然性を明らかにする鍵となるのが、次の(11)の記載である。

- (11) 動物体内を循環する体液の一種。脊椎動物では血球（赤血球・白血球・血小板）および血漿から成る。組織に酸素・栄養・ホルモン・抗体を供給し、二酸化炭素その他の代謝生成物を運び去る。白血球は食作用や抗体産生により、生体防御の役をする。血（ち）。

— 『広辞苑』（s.v. けつ - えき 【血液】）（下線筆者）

このように、「血液」とは「動物体内を循環する体液の一種」ではあるが、我々の生命活動を維持するためには、肉体の「内部」を流れる必要があるのは言うまでもない。裏を返せば、肉体の「外部」に大量に流れ出してしまうと、我々の生命活動は保ち得ないのである。ここに、次の(12)–(14)に収束する人間としての認識が存在することになる。

- (12) 生命は人間の「内容物（＝液体）」である。
(13) 血液は人間の「内容物（＝液体）」である。
(14) 「生命」と「液体」を結び付ける共通項は「血液」である

そして、これらは同時に、上出(7)の疑問を解き明かす決め手ともなる。なぜなら、「魂」とは「生命」を意味するが、人間の生命を維持する上で必要不可欠なものが「血液」という「液体」であり、体内の血液を失ってしまうと人間は死に至ってしまうからである。こうした「生命」と「血液」との概念的並行性を以下（15a-b）としてまとめる。

- (15) a. 「血液」は人体の内容物であり、容器である「肉体」の外部に流れ出してしまうと死に至る。
b. 「生命」は人体の内容物であり、容器である「肉体」の外部に出ってしまうと死に至る。

「血液」を媒介項として「生命」が「液体」と結びつく概念は、次の(16)の実例にも観察される。

- (16) The glacier knocks in the cupboard,
The desert sighs in the bed,
And the crack in the tea-cup opens
A lane to the land of the dead.

(氷河は食器棚に突き当たる、
砂漠はベッドでため息をつく、
そしてティーカップの亀裂は
死者の国への路を開く。)

— Lakoff and Turner (1989: 20) (日本語訳 大堀 (訳) (1994: 26) (下線筆者))

「言語形態が変わっても同じ『人間という生物』である」という経験から、このような認知メカニズムが成り立っていることは次の(17a-b)からも立証される。

- (17) a. あの戦争で、多くの血が流された。
b. あの戦争で、多くの生命が失われた。

したがって、次の(18)に示すように、「生命」という「流動性内容物」が干からびてしまうと、必然的に生命活動が絶たれることが意味されるのである。

- (18) 生命が枯れ果てる。

しかしながら、血液の持つ特性はなにも「液体」のような「流動性」のものに限られるだけではなく、次例(19)に示されるような「温かみ」、つまり流れることによって生み出される「熱；温度」という特性も備えていることが観察される。

- (19) — が通う

事務的ではなく、暖かみがあるさま。「血の通った処置」

— 『広辞苑』(s.v. ち【血】)(下線筆者)

その結果、血液の流れによって生じる「熱；温度」を媒介項として「生命」と「炎」とが結びつくことになる。つまり、次の(20a-b)の背後には、

- (20) a. 命の灯火を燃やす。
b. 命が燃え尽きた。

下記(21)のメタファーが機能しているといえる。

- (21) 「生命」は「炎」である（〔英語〕 LIFE IS A FLAME / 〔スペイン語〕 LA VIDA ES LA LLAMA）

詰まるところ、「生命」という抽象物が概念化されるには次の(22a-b)にまとめられる認知活動が概念的に関与していると考えられる。

- (22) a. 人間は生命活動を表すにしても「液体の流動性」及び人体の中での「血液の保持性」に焦点が当たる場合は「容器－内容物」の認識を基盤にした「生命は液体である」というメタファーが機能する³。
b. 他方、血液の流れによって生じる「熱；温度」に焦点が当たる場合は「生命は炎である」というメタファーが機能する。

以上の理由から、人間は自らの肉体を「生命という魂を入れる容器」として認識し、内容物である「魂」が容器である「肉体」から外に出ることは「死」として捉えていることが導き出されるのである。

3.3.2.2. 「精神」と「肉体」との関係

他方、「心」に対応するもう一つのものとして、下記(1)に見られるように、「精神（〔英語〕 spirit / 〔スペイン語〕 espíritu）」なるものが存在する。

- (1) スピリチュアルやスピリチュアリストなどの言葉は、スピリット (*sprit*) からきている。「精神」とか「霊」を意味する言葉だ。そしてこの語は、ラテン語のスピリトゥス (*spiritus*) が語源で、これは「微風、呼吸、生命、魂、精神」という意味を持ち、さらにさかのぼると、スピラーレ (*spirrare* = 息を吐く、呼吸する)、さらに遡れば印欧祖語スペース (※ *speis* = 吹く) になる。元来は、息を吐く時の擬声音だった。… いずれにせよ、精神や霊を表すスピリットは、人間の呼吸、「いき」と関係がある。フランス語のエスプリ (*esprit*) などもそうだ。そして、このことは、「霊」や「靈魂」を表す語の共通点でもある。「靈魂」はそれだけが独立していたのではなく、「肉体」との対比で考えられてきたということの、一つの証でもあるだろう。

— 渡部 (2009: 184-185) (一部省略・下線筆者)

この「精神」は、次の(2)にも示されているように、

- (2) さて、このようにして精神・神・物体という三つの実体の存在が証明されたのち、心身の実在的区別が確定される。その場合、論拠となるのは、私が明晰・判明に理解するものはすべて、その通りに神によって作られているのだから、「ある一つのものが他のものと異なることが私に確実であるためには、私がその一つのものを他のものと離れて、明晰・判明に理解しようということだけで十分だ」ということである。精神は思考することによってのみ、すなわち、身体なしにも存在しうる。これに対し、物体 (身体) は精神とまったくかわりなしに、延長することによって存在する。つまり、精神は全く非延長的な思惟を本性とする実体であり、物体はまったく霊的な性質をもたない、ただ延長だけを本性とする実体ということになる。このような心身分離的な二元論的立場にたつとき、精神の純粹性と独立性が明らかにされ、それによって靈魂の不滅を論証するための最初の前提条件が確保される。

— 伊藤 (1967: 105) (下線筆者)

「身体 (すなわち肉体) なしにも存在しうる」ものだと考えられている。また、

「魂」は単に「生命」とも言えるべきものであり、そこに意思性は存在しないが、「精神」はそれ自体が意思を持つものだと言える。つまり、以下(3)の『旧約聖書』「創世記」第2章 第7節の記述では、

- (3) Then the LORD God took some soil from the ground and formed a man out of it; he breathed life-giving breath into his nostrils and the man began to live.

(それから、主なる神は大地から土を取り、それで人を形作った。そして、神がその鼻孔の中に命を与える息を吹き込むと、人は生き始めた。)

— 日本聖書協会（編）（2008：（旧）3）（日本語訳筆者）

神は単に「生命」を授けたのではなく、自らの考えや感情を持って動くことができる「意志」を授けたのだと考えられる。故に、我々人間は、各々の意思に従って行動することが可能なのである。

以下(4)に、「魂（[英語] soul / [スペイン語] alma）」と「精神（[英語] spirit / [スペイン語] espíritu）」との違いをまとめる⁴。

- (4) a. 「魂（[英語] soul / [スペイン語] alma）」:

「生命」のことであり、意思を持たない。内容物である「魂」が容器である「肉体」から外に出ることは「死」を意味する。

- b. 「精神（[英語] spirit / [スペイン語] espíritu）」:

それ自体が意思を持つもの。内容物である「精神」が容器である「肉体」から外に出ても存在し得る。

ちなみに、1970年代にメガ・ヒットとなったイーグルス（Eagles）の「ホテル・カリフォルニア（Hotel California）」という曲の歌詞には次の(5)の一節が登場する。

- (5) “We haven’t had that *spirit* here since 1969”

（私たちは1969年以來、あの蒸留酒／精神を失くしています）

— ‘Hotel California’（イタリック・日本語訳筆者）

これは、ワインを注文した「私」にホテルの給仕長が「1969年以來というもの、ここではそのスピリットを切らしております…」と答えた場面である。ここでのspiritはまさに「蒸留酒」と「精神」との掛け言葉となっており、上記(5)の一節は当時のカリフォルニアの、あるいはアメリカの、ひいてはロック／ポップ・ミュージックのどうしようもない閉鎖状態を暗に示そうとした強烈なメッセージだったと考えられるのである。

古くから洋の東西を問わず、我々人間が普遍的に持つであろうこのような考え方に基づけば、「精神」こそが、「肉体」を操っているものに他ならないと言える。そのため、精神が肉体の外に出てしまうと、意思性を失うことから、もはやその肉体を制御することは不可能となってしまうのである。

このように、前出§3.2.2.(5a)（以下に(6)として再掲載）の疑問は、

- (6) 何故、「自己 (Self) が主体 (Subject) の外に存在すること」が「制御不能」を意味することになるのか？

「容器＝肉体」／「内容物＝精神」として捉えることで初めて解決されると言える。さらに、このように考えれば、前出§3.2.2.(5b)（以下に(7)として再掲載）の疑問をも解決することができる。

- (7) 単に「自己 (Self) が主体 (Subject) の外に存在すること」が「制御不能」を意味するのであれば、主体 (Subject) が位置する場所は自己 (Self) の「真横 (beside)」でなくてもよいはずである。しかしながら、しばしばbesideの類義とされるby⁵を用いてby oneselfと表現すると、「我を忘れて」という意は生じない。このように、「我を忘れて」を意味するには、何故「漠然とした近接」を表すbyではなく「真横」概念を表すbesideを用いなければならなかったのか？

つまり、確かに、内容物である「精神」が容器である「肉体」の外に出て、完全に分離して一定の距離を持ってしまった場合、spirit がいくら soul とは異なるといえども、それは 'expire' (< ex- = out of, -pire = spirit) (原義：死ぬ) となってしまう。日本語の「息を引き取る」が「仏陀が（当該者の）息を引き取る」が如く、神が与えた spirit も肉体から完全に離れて一定の距離を持ってしまえば、神にその spirit をお返しする行為、すなわち「死」と等価になってしまうのである。そのため、「我を忘れて」の意であれば、精神は肉体から離れて存在するわけにはいかないのである。

この時、by は次の(8)に見られるように、

- (8) 'by' は本来、ある物体が別の物体の側面に対して位置することを示した。やがてこの意味を 'by the side of'、'by one's side' 等の句表現に譲り、「ある物体を中心にして、それをとりまく領域内にある比較的近距离の位置（≡ a little away from）」を新たな原義とするに至った。

— 上野 (1995: 93) (下線筆者)

「比較的近距离の位置（≡ a little away from）」を意味するため、近くに存在していれば、或る程度距離が存在していても問題は無い。他方、beside は、以下(9)に示されるように、

- (9) この意味変化は類義語の 'beside' のそれに類似し、両語の中核的意味の差は単に「距離」の差にしかすぎない。しかし、この距離の差が両語の意味変化の相違なる部分に大きく関与し、たとえば、'beside' の原義である「すぐ真横 (right next to)」が比較の意を生む (John is short *beside* Jeff.)。

— 上野 (1995: 93) (下線筆者)

「すぐ真横 (right next to)」を原義とするため、beside の場合には二者間の距離を許容し難いと言える。

このような意味の違いから、「肉体」と「精神」とが分離していると捉えられ兼

ねない by より、「肉体」と「精神」とが真横に位置する beside が選択されたのだと考えられる。ここで、beside oneself の概念の捉え方を以下(10)にまとめる。

(10) X be beside X-self の捉え方：

- (a) 「容器」である「肉体 [X-self]」からその「内容物」である「精神 [X]」が抜け出し、その「肉体」の真横に [beside] 並び合って存在する [be]。
- (b) 本来、肉体を操るはずである精神が肉体と分離することで、その制御能力を失っていることを表す。ただし、beside は「真横」を意味することから、肉体と精神は完全には分離していない⁶。
- (c) 「我を忘れて」の意が生じる。

また、be [feel] (like) oneself や be out of oneself に関しても、下記(11)–(12)に示されるように、同様に概念化のプロセスを説明することが可能である。

(11) X be [feel] (like) X-self の捉え方：

- (a) 「内容物」である「精神 [X]」（の調子）が「容器」である「肉体 [X-self]」（の調子）のように [like] 存在する [be] [のよう感じる [feel]]。
- (b) 本来、肉体と魂とのバランスが保たれており、精神は肉体を本来の能力通り制御し、操ることができる。
- (c) 「〈人が〉精神的 [肉体的] に本来の調子である」の意が生じる。

(12) X be out of X-self の捉え方：

- (a) 「精神 [X]」としての自分が、「容器」である「肉体 [X-self]」の [of] 外に [out] 存在する [be]。
- (b) 本来、肉体を操るはずである精神が肉体と分離することで、その制御能力を失っていることを表す。
- (c) 「我を忘れる」の意が生じる。

さらに、§ 2. 2.(6) (以下に (13) として再掲載) についても、

(13) a. *I cut myself shaving this morning.* (NOT ~~*I cut me...*~~)

(私は今朝、髭を剃っている私自身を傷つけた

→ 私は今朝、髭剃り中に切り傷を作った)

b. *We got out of the water and dried ourselves.* (NOT ~~*...dried us.*~~)

(私たちは水の外に出て、私たち自身を乾かした

→ 私たちは水から出て、体を乾かした)

c. *I'm going to the shops to get myself some tennis shoes.*

(私は私自身のためにテニスシューズを買うという目的で店に行っている

→ 私はテニスシューズを買うために店に行っている)

— Swan (1995: 471) (下線・日本語訳筆者)

各々、次の (13'a-c) に見られるように、同様の捉え方で説明することが可能である。

(13')a. 「精神」としての自分が、今朝、「容器」である「肉体」としての自分を操ることで切り傷を作った。

b. 「精神」としての自分が、水の外に出て、「容器」である「肉体」としての自分を操ることで乾かした。

c. 「精神」としての自分が、「容器」である「肉体」としての自分を操ることでテニスシューズを買うために店に行っている。

このような「自己 (Self)」を容器である「肉体」とし、また主体 (Subject) を内容物である「精神」とする捉え方をよく示す例として、以下(14)-(17)が挙げられる。

(14) a. *I feel deep conflict within myself.*

(自分の中に深い葛藤を感じる)

— 『英語活用大辞典』 (s.v. ¹conflict 【形容詞・名詞+】)

b. 「肉体」という容器の中に深い葛藤が存在することを「精神」が感じている。

(15) a. Try to get out of *yourself* and to socialize more.

(自分の殻から出て人ともっとつきあうように努めなさい)

— 『英語活用大辞典』 (s.v. oneself 【前置詞+】)

b. 「肉体」という容器の中から「精神」を出すように努める必要がある。

(16) a. draw sb out of himself

(人を自分の殻から引きだす)

— 『英語活用大辞典』 (s.v. ²draw 【+前置詞】)

b. 「肉体」という容器の中から「精神」を引き出す。

(17) a. I felt *myself* quite *another man*.

(自分が別人になった [まるで生き返ったような] 気がした。)

— 『リーダーズ英和辞典』 (s.v. another, *pron.*)

b. 「精神」が容器である自身の「肉体」を全く別人のもののように感じた。

また、次の(18)に見られる連語表現 enjoy oneself は、

(18) enjoy oneself 愉快に過す。

Enjoy yourselves!

さあ大いに楽しくやってください。

He *enjoyed himself* over his whiskey.

楽しくウイスキーを飲んだ。

— 『リーダーズ英和辞典』 (s.v. enjoy, 【成句】 enjoy oneself.)

下記(19)として捉えられやすいと考えられる。

(19) 自分自身 [oneself] を楽しませる [enjoy] → 愉快に過す

しかしながら、動詞 *enjoy* には、以下(20)に示されるような「使役」を表す概念構造は存在しない。

(20) *X enjoy Y : [X CAUSE Y TO ENJOY]

そのため、上記(19)のような捉え方はできないと考えられる。換言すれば、*enjoy* はあくまで単なる他動詞として考えなければならないと言える。そこで、ここまでの論を合わせて鑑みれば、X *enjoy* X-self という文構造において、X は内容物である「精神」、X-self は容器である「肉体」であると考えられる。つまり、X *enjoy* X-self は次の(21)として捉えられる。

(21) 「精神 [X]」としての自分が、「容器」である「肉体 [X-self]」を楽しむ [enjoy]。

しかしながら、「[肉体 [X-self]」を楽しむ [enjoy]」ということをも文字通りに捉えると全く意味を成さない文となる。この問題を解決する鍵となるものが「メトニミー」である。つまり、「肉体 [X-self]」という語を用いて、その肉体 [X-self] が存在している状況を指示しているのである。つまり、X *enjoy* X-self は下記(22)として捉えればよい。

(22) 「精神 [X]」としての自分が、「容器」である「肉体 [X-self]」が存在している状況を楽しむ [enjoy]。

こうした捉え方の妥当性は、上記(18)で観察した例文（以下に(23)として抜粋）に見ることができる。

(23) He *enjoyed himself* over his whiskey.

楽しくウイスキーを飲んだ。

— 『リーダーズ英和辞典』 (s.v. *enjoy*、【成句】 *enjoy oneself*.)

以下(24)に見られるように、

(24) The lamp is *over* the table.

(そのランプは食卓の真上にある)



over : 2つのものが [真上-真下] 関係

→真上のものが真下のものを覆うような「円弧」のイメージ

— 上野・森山・福森・李 (2006: 735) (一部変更筆者)

X over Y という句構造において、X は Y の真上に (円弧状に覆うように) 存在していなければならない。そのため、上記(23)においても、himself は whiskey の上を覆うように存在していなければならないことになる。しかしながら、ウイスキーを飲むのに、ウイスキーの真上を覆うように存在するということは明らかに不自然な行為／状態であると言える。但し、この himself を上記(22)で見たように「himself が存在している状況」と捉えれば、次の(25)に示されるように、全く問題無く解釈され得るのである⁷。

(25) 彼はウイスキーの真上を覆うように存在する、彼自身が存在している状況を楽しんだ。

このように、連語表現 enjoy oneself は、メトニミー表現と解釈することで説明可能となるのである。

さらに、以下(26)が表す事象においては、

(26) SUSANNA : Did they find Lisa?

(リサを見つけたの?)

VALERIE : No.

(いいえ。)

SUSANNA : I... I couldn't stand up to her. A decent person would have done something. Shut her up. Gone up stairs. Talked to

Daisy.

(わ…わたし、彼女に我慢できなかつたの。まともな人間なら、何かをしてたわ…。彼女を黙らせるとか、2階に行くとか、デイジーに話しかけるとか…。)

VALERIE : Melvin said you went upstairs.

(メルヴィンはあなたが2階へ行ったと言っていたわ。)

SUSANNA : Too late.

(遅すぎたの。)

VALERIE : What would you have said to her?

(彼女に何て言ったの?)

SUSANNA : I don't know... That I was sorry. That I'll never know what it was like to be her. But I know what it's like to wanna die. How it hurts to smile. How you try to fit in, but you can't. How you hurt yourself on the outside... to try to kill the thing on the inside.

(わからない…。ごめんなさいかな…。彼女がどんな気持ちでいたかなんて、決してわかってあげられるものじゃないってこと。だけど、死にたいってことがどんなものかはわかる。笑顔でいることがどんなに傷つけるか。どんなになじもうとしても、できないとか。どんなに肉体の外側に面している自分自身を傷つけるか…、肉体の内側にあるものを殺そうとするために…。)

— 映画 *Girl, Interrupted* (2003, 米, Columbia Pictures Industries)

(邦題『17歳のカルテ』)(用例中のイタリック・日本語訳筆者)

皮膚の表面を境にして存在する、自身の肉体の外側に面している自分自身 (= 自身の皮膚) を (リストカットをするなどして) 傷つけること (hurt yourself on the outside) と、自身の肉体の内側にあるもの (= 心の傷) を消し去ること (kill the thing on the inside) とが対比されていることが確認されるのである。

また、by oneself という連語表現は、次の(27)の記述に示されるように、「同伴者がいない」という意味合いでの「ひとりぼっちで」という alone と同様の意として用いられることもあれば、「他者の力に頼らず自分だけの力で」という意味合いでの「独力で」という alone では通常表されない意としても用いられる⁸。

(27) *by onesélf

(1) ひとりぼっちで (alone)

(2) 独力で (without help), ひとりで (cf. for ONESELF)

— 『ジーニアス英和大辞典』 (s.v. oneself, 【成句】 by onesélf) (下線筆者)

このように by oneself が「ひとりぼっちで」と「独力で」という2つの意を持つに至った点に関しても『肉体』と『精神』という対立概念の観点から説明が可能となる。

まず、前置詞 by の中核義は、下記(28)と考えられる⁹。

(28) 或る物体を中心にして、それをとりまく領域内に在る比較的近距离の位置
(≡ a little away from)

— 上野・森山・福森・李 (2006: 481)

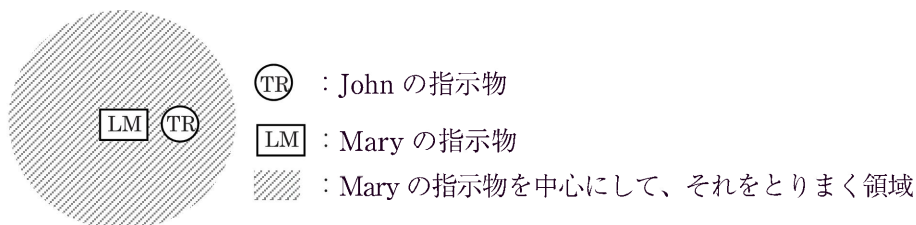
たとえば、次の(29)の文は、

(29) John sat *by* Mary.

(ジョンはメアリーのそばに座った)

「Mary の指示物を中心にして、それをとりまく領域内に在る比較的近距离の位置に John の指示物が座った」という事象を表している。以下(30)にそのイメージ・スキーマを示す¹⁰。

(30)



つまり、連語表現 *by oneself* を用いた下記(31)の文は、

(31) The old woman lives *by herself*.

(その老婆はひとりぼっちで暮らしている)

『『肉体』と『精神』という対立概念』の観点から次の(32)として捉えられる。

(32) その老婆の「精神」は、容器である自身の「肉体」と近接関係にある状態で暮らしている。

この時、「精神」と「肉体」とは近接関係に位置していることから、本来、両者の間には異物が入り込むスペースが存在すると考えられる。しかしながら、この可能性を逆に働かせて、異物が入り込むスペースが存在するにも拘らず、その異物の介入を排除して「精神」と「肉体」とが近接関係にあることを示している。つまり、*by oneself* には「精神と肉体との間に他者を入れないで近接関係にある」という認識が働いている。そして、この「他者を入れない」という認識は、逆に言えば「他者ではなく、自身の肉体で」という「限定」の認識が働くことから「ひとりぼっちで」の意となり、しばしば *alone* で言い換えられるのである。

さらに、「他者を入れない」ということは、当然のことながら「他者の力に頼らず自分だけの力で」行わなければならないため、そこから「独力で」の意が生じることになるのである。

こうした連語表現 *by oneself* の意味拡張のメカニズムを以下(33)にまとめる。

(33) 連語表現 by oneself の意味拡張のメカニズム

a. 前置詞 by は「近接」概念表示語であることから、X be by X-self は自身の「精神 [X]」が、容器であるその「肉体 [X-self]」との近接関係 [by] に存在している [be] ことを表す。

b. 「精神 [X]」と「肉体 [X-self]」とは近接関係にあることから、本来、両者の間には異物が入り込むスペースが存在すると考えられる。

c. その可能性を逆に働かせて、異物が入り込むスペースが存在するにも拘らず、その異物の介入を排除して「精神」と「肉体」とが近接関係にあることを示している。つまり、X be by X-self には「『精神 [X]』と『肉体 [X-self]』との間に、他者を入れないで近接関係 [by] に存在している [be]」という認識が働いている。

d. 「他者を入れない」という認識は、逆に言えば「他者ではなく、自身の肉体で」という「限定」の認識が働くことから「ひとりぼっちで」の意となり、しばしば alone で言い換えられる。

例) The old woman lives by herself.

(その老婆の「精神」は、他者を入れないで容器である自身の「肉体」と近接関係にある状態で暮らしている。

→ その老婆はひとりぼっちで暮らしている)

e. 「他者を入れない」ということは、当然のことながら「他者の力に頼らず自分だけの力で」行わなければならないため、そこから「独力で」の意が生じる。

例) John did the whole of the work by himself.

(ジョンの「精神」は、他者を入れないで容器である自身の「肉体」と近接関係にある状態でその仕事を全部やった

→ ジョンは他者の力に頼らず自分だけの力でその仕事を全部やった)

→ ジョンは独力でその仕事を全部やった)

なお、aloneに「独力で」という意が派生していないのは、次の(34)に示されるように、

(34) alone adj., adv.

《?a1200 Layamon》ひとりで [の], たた…だけ (の).

◆ ME *alon(e)*, *allon(e)* ← *al one* ← OE (e)all (adv.) ‘ALL(adv.)’ + *āna* alone (← *ān* ‘ONE’) : cf. Du. *Alleen* / G *allein*. ◇ ME *alone* は *one* only を強意の副詞 *al(l)* で強めたもの. したがって英語の *all alone* は語源的に冗語法である. …

— 『英語語源辞典』(s.v. *alone*, *adj.*, *adv.*) (下線・一部省略筆者)

aloneは本来 all alone (全部で一つ、全く一つ)に遡及することから、「同伴者が存在することなく全く一人で → 唯一独りの状態」の概念を表しているのであり、そこには、連語表現 *by oneself* が「独力で」という意に拡張するきっかけとなった「他者を入れない」という認識や「異物が入り込むスペース」といったものは存在しないからである。以下(35)に alone の意味拡張のメカニズムをまとめる。

(35) alone の意味拡張のメカニズム

(同伴者が存在することなく全く一人 (all alone) で) → 唯一独りの状態、一人ぼっちで

しかしながら、ここで気をつけなければならないことがある。例えば下記 (36)に見られるように、

(36) I went to Madrid.

(私はマドリッドに行ったのです)

再帰代名詞 *oneself* が用いられていない場合、これまでの主張通りに論を展開すれば、主語に位置している名詞 ‘I’ は「精神」としての自分 (ここでは「私」とい

うことになる。しかしながら、（あたかも幽体離脱をしているかのように）「精神」としての自分のみがマドリッドに移動するわけではない。既に述べてきたように、「精神」は通常「肉体」としての自分を自由に操る能力を持っているわけだから、現実世界においては、「肉体」としての自分自体も移動することになる。

これに対し、次例(37)のように、

(37) I went to Madrid *myself*.

（私は私自身マドリッドに行ったのです）

再帰代名詞 oneself（ここでは myself）が用いられている場合、「精神」によって操られる「肉体」が明確に言語化されていることから、その肉体の操作性が強調されることになる。そのことから、「他でもない私自身が…」といった意味合いが生じると考えられる。

このような考え方は、下記（38）に示される哲学的見解とも一致する¹¹。

(38) 坂部恵 [1985] は、「行為する」を意味する日本語「ふるまう」を、西洋語とも対比させながら、非常に興味深いことを言っている。「ふるまう」に対応する西洋語は、“sich verhalten”、“se conduire”、“behave oneself” などである。これらは、いずれも再帰動詞だ。「行為」を表す動詞が再帰動詞であるということは、行為の自己指示性についての覚識が、言語表現に落とした影のようなものと考えられよう。だが、もっと重要なのは、再帰動詞には、特殊な含み、つまり自己を分裂させ、自己に対してさながら他者として関わろうとする志向が、暗示されているということである。このような含みは、日本語の「ふるまう」においては、より明白である。そこには、「舞う」という語に示されるような「演劇性」の契機が含意されている。演劇性の契機とは、他者に見られていることに対する感覚である。つまり、「ふるまう」とは、他者の承認あるいは拒絶の眼差しの前に演ずることなのである。

— 大澤（1999: 115）（下線筆者）

このように考えれば、さらなる問題も解決することが可能となる。例えば、佐久間（2009）には、以下(39)–(40)のような記載が見られる。

- (39) 次の文は大学入試に出題されたものだが、はたして英語圏で通用するのか、最近は疑わしい。

Mrs. Brown told her daughter to (dress herself / dress / get dressed) at once.
「ブラウンさんは娘にすぐ服を着るように言った」

この文に対して、dress herself、dress、get dressed の3つが同意で使えることになっている。この中で、dress herself については、「自分自身に服を着せる = 服を着る」という従来の公式が通用しない。ネイティブ・スピーカーはこれを「(用事が親の手を借りず) 自力で服を着る」と解釈する。そうすると日本語訳が変わるので、問題自体が成立しない。

— 佐久間（2009: 4）（下線筆者）

- (40) そこで、3つの英文について質問した。意味はいずれももちろん「彼は川で溺れて死んだ」のつもりである。

- ① He drowned in the river.
- ② He got drowned in the river.
- ③ He drowned himself in the river.

次のように返ってきた。

To say that “he drowned himself” means that he committed suicide. (アメリカ人回答者)

「③は『彼は（川に身を投げて）自殺した』という意味だ」

つまり 「自分自身を溺れさせる」 → 「溺れる」ではなく、「自らすすんで

溺れる」→「自殺する」と解釈されると言う。この傾向はとくにアメリカ英語で顕著だ。

— 佐久間（2009: 6-7）（下線筆者）

こうした問題に関しても、「精神」によって操られる「肉体」が明確に言語化されていることで、その肉体の操作性が強調されたことに起因すると考えられる。

4. スペイン語再帰代名詞 *sí*、*se* の捉え方

また言語（表現）という「容器」そのものは相異なっているとしても、それを使用するのは「人間」という同じ生物であり、自身の生身の肉体や知覚器官を通して繰り返し得た経験こそが「人間の本質の産物」に他ならないことから、そこには「共通のものの見方」が存在すると考えられる。下記(1)がその詳細である。

- (1) Each such domain [= a basic domain of experience] is a structured whole within our experience that is conceptualized as what we have called an *experiential gestalt*. Such gestalts are *experientially basic* because they characterize structured wholes within recurrent human experiences. They represent coherent organizations of our experiences in terms of natural dimensions (parts, stages, causes, etc.). Domains of experience that are organized as gestalts in terms of such natural dimensions seem to us to be *natural kinds of experience*.

They are *natural* in the following sense: These kinds of experiences are a product of

Our bodies (perceptual and motor apparatus, mental capacities, emotional makeup, etc.)

Our interactions with our physical environment (moving, manipulating objects, eating, etc.)

Our interactions with other people within our culture (in terms of social, political, economic, and religious institutions)

In other words, these “natural” kinds of experience are products of human nature. Some may be universal, while others will vary from culture to culture.

(そのような各々の領域 [= 基本的領域の経験] は我々の経験の内部で構造化される全体であり、今まで述べてきた「経験のゲシュタルト」として概念化されるものである。そのようなゲシュタルトは、繰り返された人間の経験内部で構造化された全体を特徴付けることから、「経験的に基本的なもの」である。それらは、自然な相（例えば、部分、段階、因果関係など）の観点から、我々の経験を一貫して組織化することを示している。そのような自然な相の観点からゲシュタルトとして組織化される経験の相は我々にとって「自然な種類の経験」のように思われる。

それらは以下の意味において「自然」である：この種の経験は以下のものから生じる。

我々の肉体（知覚的及び運動神経器官、知的能力、感情の気質等）

物理的環境との相互作用（移動、物体の操作、食行為等）

（社会的、政治的、経済的、そして宗教的状况内の観点からの）同一

文化内における他の人々との相互作用

換言すれば、これらの「自然な」種類の経験は「人間の本質の産物」なのである。それらの経験の或るものは普遍的かもしれない一方、他のものは文化によって異なる場合もあるかもしれない。

— Lakoff and Johnson (1980: 117-118) (下線・[] 内表記・日本語訳筆者)

こうした「自然な種類の経験」から得られる「共通のものの方」が存在するという考えに基づけば、次の (2a-f) に示されるように、スペイン語母語話者の無意識的意識においても同様の概念化が成され得ることは言を俟たない。

(2) a. *vovler en sí* 意識を回復する

◎ 「精神」が「容器」である「肉体 [sí]」に [en] 戻る [vovler]」イメージ。

- b. *estar en sí* 意識がはっきりしている、正気である
 ◎ 「精神」が「容器」である「肉体 [sí]」に [en] 存在している [estar] → 肉体と精神とのバランスが保たれており、魂は肉体を本来の能力通り制御し、操ることができる」イメージ。
- c. *recuperarse* 立ち直る、回復する
 ◎ 「精神」が「容器」である「肉体 [se]」を取り戻す [recuperar]」イメージ。
- d. *embeberse en ...* ...に没頭する
 ◎ 「精神」が「容器」である「肉体 [se]」を...に [en] 浸み込ませる [embeber]」イメージ。
- e. *estar fuera de sí* 怒りに我を忘れる
 ◎ 「精神」が「容器」である「肉体 [sí]」の [de] 外に [fuera] 存在している [estar] → 肉体を操るはずである精神が肉体と分離することで、その制御能力を失っている」イメージ。
- f. *entrar dentro de sí* 自省する
 ◎ 「精神」が「容器」である「肉体 [sí]」の [de] 中に [dentro] 存在している [estar] → 肉体と精神とのバランスが保たれており、精神は肉体を本来の能力通り制御し、操ることができる」イメージ。

当然のことながら、以下 (3a-f) に見られるように、主語の指示物と同一物を指示する場合の *se* (*sí*) に関しても同様の捉え方が可能である。

- (3) a. *mirarse* 自分を見る
 ◎ 「精神」が「容器」である「肉体 [se]」を見る [mirar]」イメージ。
- b. *acostarse* 身を横にする → 寝る
 ◎ 「精神」が「容器」である「肉体 [se]」を横たえる [acostar]」イメージ。
- c. *sentarse* 自分を座らせる → 座る
 ◎ 「精神」が「容器」である「肉体 [se]」を座らせる [sentar]」イ

メージ。

d. lavarse (+定冠詞+身体部位) 体/身体部位を洗う

◎ 「精神」が「容器」である「肉体 [se]」を洗う [lavar]」イメージ。

e. ponerse + 定冠詞+身に付けるもの ~を身に付ける

◎ 「精神」が「容器」である「肉体 [se]」に身につけるものを置く [poner]」イメージ。

f. quitarse + 定冠詞+身に付けるもの ~を脱ぐ/外す

◎ 「精神」が「容器」である「肉体 [se]」から身につけるものを取り去る [quitar]」イメージ。

5. おわりに

現在なされている「大学改革」や「FD」とは新自由主義の思想の下になされている改革である。それが故に、「大学改革」や「FD」は学生、教員、学校職員各々にとって達成することが極めて不可能に近い目標を掲げているとしか捉えられない。教員の能力の向上とは、如何なる政治体制、国家体制であろうとも教壇に立つ者にとっては不可欠な要因だと筆者は考える。しかしながら、この「改革」は教員が自身の能力向上のモチベーションさえ奪ってしまうものではないかと危惧される。

ここからはその理由を述べる。

言語は文化の基底に存在するものである以上、外国語教育とは文化教育の一環であるとの認識から本論を展開してきた。つまり、外国語を習得するには単なる丸暗記ではなく、当該言語が内属している文化そのものから理解しなければならない、と考える。そして、このような外国文化を深く知ることからなされる授業とは、学生のモチベーションだけではなく、知力の向上にも必ず貢献できると信ずるものである。

にも拘らず、我が国の教育の現状はどうか。

名ばかりのコミュニケーション中心の授業、単なる運営にしか過ぎない教育方法の重視、そういった授業で利用するためにアルファベット圏の学生が使う英語テキストを「世界標準」として日本の教育現場へそのまま持ち込む拝米主義…。このよ

うな潮流が主流になった今や、まず指導内容におけるレベルの地盤沈下が生じてしまった。古事記・日本書紀という古代文化に根つき、茶道・華道・能・狂言など現代にも通用する古典文化・世界観を尊びながら、近代技術においても高度なレベルをも誇るアジアの知と文化の牽引国、日本はどこにいったのか。かつてはロック、ポップス、J・S・ミルなど思想書の輪読が主であった大学の英語の授業風景はなぜゆえに置き去られてしまったのか。「ここからいちばん近いレストランはどこですか」といった皮相浅薄・軽佻浮薄な英語だけが教授され、それを具現化するだけの（それもその実行に一切の苦痛を感じない）語学教員が求められ、結果、研究の意義さえも認識できないような資質しか持たない日本人教員の知力崩壊を生じさせた。まさに日本のアカデミズムの崩壊である。これに付随して、「ネイティブ教員」という名目で日本語もままならない大量の外国人語学教員を学位審査どころか業績審査さえも厳格に行なうことなく非常勤・専任教員として雇用し、なぜかおしなべて日本人語学教員よりも高い給与を支払う、という事態も生じている。さらには、日本語もままならない彼らのために日本人語学教員の一部は西洋コンプレックス交じりに学校事務をご丁寧に取り足取り指導、代行し、余計に自身の研究や教育に携わる時間的資源を浪費・犠牲にする（もしくはそれにさえも気づくことなく漫然と日々を過ごす）、という事態も生じている。このように雇用された外国人語学教員たちの多くは高い給料をもらう一方で、高度な内容を有する研究や著書どころか論文一本さえ書くこともなく、教育に関しても皮相浅薄・軽佻浮薄なものしか提供する能力を持たず、また、それを向上させる意欲もなく、巨額の給料を研究のために利用することもなく、それを使ってただ不必要に大きな邸宅を自国や日本に購入したり、不必要に大きな車を購入したりするために利用しているのである。エッセイ・レベルのものを「論文」と称して生き残りを図る行為も学問研究を冒瀆する所業に他ならない。

このような外国人語学教員を雇用する一方で、高度な教育を受け、研究業績も確固として有する若く優秀な日本人の研究者予備軍 — 彼らの多くは博士号保持者 — は大量に路頭に迷う、という悲劇的な事態も生じている。機会さえ与えれば、高度な研究・高度な教育が可能な彼らを排除し、学士の学位さえあやしい外国人を雇用することにより、結果的によりいっそう大学教員の知的水準を下げるという悪影響

をもたらしている因果の連鎖を断ち切らなければならない。他方、このような外国人（教員）にコンプレックスと羨望を持ち、それゆえに悪影響を受け、「大学語学教員の能力とは授業のパフォーマンス能力にある」と信じる、救い難い日本人語学教員が加速度的に増殖している。このような現状を容認・推進する国家の在り方には「アメリカ帝国主義に我が国は呑み込まれてしまったのか」と大いなる疑問を呈さざるを得ない。果ては、こうした「大学語学教員の能力とは授業のパフォーマンス能力にある」に代表される幻想を持ったまま、記号論のメッカであるフランスにおいて「教育方法」なるものの学会発表を行ない、国家の恥部を露呈させる日本人語学教員まで登場している。国辱のそしりを逃れられないであろう。

しかし、考えてみれば、彼ら語学教員もまた被害者であると言わねばなるまい。それが大学教員の本分である、と信じているのだから。自己省察能力が欠如していると彼らを非難することはできても、疑義を差し挟まなかったかどで非難することはできない。なぜなら、「これはおかしい」と気がついている語学教員もまた、同様のテキストを使い、同様の指導要綱、同様の授業時間数を提示されている以上、気がついていない教員と大きく違った授業などできないからである。確かに、「おかしい」と思っている以上さまざまな工夫を凝らすことはできる。その限り、気がついていない教員よりはより深い内容の授業ができる可能性はあるだろう。しかし、筆者もまた、理想の授業ができていのかどうかについては、まったく自信を持つことができない。

根本の問題は、個々の教員のレベルには存在していないのではないか。問題は上記の如き「底の浅い教育」をせよと命じる国家的政策そのものなのではないか。

この政策は国際的な競争社会で生き抜く（学）力を持つことを理想に掲げている。そして、語学教育に関しては、それが「コミュニケーション能力」と直結している。なにゆえ国際的な競争社会で生き抜く学力が「コミュニケーション能力」と結びつくのだろうか。まずは、そここのところに納得がいかない。

しかし、もっと掘り下げてみよう。「国際的な競争社会」とは何か。なにゆえ国際社会は「競争」していると言えるのか。なぜ「競争」しなければならないのか。

たとえば、北欧では新自由主義的政策を受容することはなく、福祉社会を目指している。これはすなわち、競争ではなく相互扶助の精神を中心に置く国家を目指しているということである。確かに、アメリカや日本から見れば、福祉政策に重点を置く国々とは経済的「繁栄」のレベルは低いと見なされるかもしれない。しかし、だからといって、そういった国々の国民が「不幸」とは限らないだろう。また、角度を変え、我々が「幸福」かどうかを考えることもせねばならないだろう。

国家主導で教育政策を考えるのが悪いとは言わない。しかし、一人の首相が主導した「構造改革」がおしなべて正しいと信じ、それに盲従することはあまりにも短絡的と言わざるを得ない。国際社会を「競争社会」と見なし、その前提からなされた「教育改革」が正しいのかどうか、あるいは我々を「幸福」にするのかどうか、今一度考えてみなければならぬ。「競争」は幸福だろうか。「競争」社会に飛び込みたいと誰もが思っているのだろうか。少なくとも筆者は思わない。他者を打ち負かし、勝ち抜き、富を得ることが文句なしに「幸福」感につながるとは自身では思えない。たとえば、法治国家として英語の 'law' という語に目を向けても上述の主張と並行する。まず、law の原義は 'lie ((人々を) 横たえる)' に遡及する。これは、英語の invent (発明する) (< in- + -vent come) が「神の創造物が先に存在し、それが与えられて (cf. subject) この世の中 [in] に存在する [come] ようになる」という概念を包含するが如く、law も同様のカトリック理念に基づき、「神が創造し給まふ自然法を人間が見つけたもの」で捉えられ、「神の下、臣民を一様にフラットに扱い、個々が立ち上がって活動させない (lie)」概念に通ずる。活動させないとはネガティブに聞こえるかもしれないが、その真意は「神が与え給まふ自然法則の下、個別の勝手な行動をさせない→法則外に他者を貶めたり独りよがりな個性を優先したりすることではない」という概念に相当する。詰まるところ、上述の主張に遡及し、「友愛の復活」概念に帰することとなる。臣民教育はあくまでも国家の発展・維持に寄与すべきものであるにも拘らず、多数のアウト・ドロッパーを生み出したり海外への優秀な人材流出を加速させたりする「個性を伸ばす教育」の正体とは一体如何なるものだったのか。大学を経済システムの一つと捉え、「学生 = 顧客」「教育 = 商品」と見なすヘンペルのカラスこそが本来求めるべき FD とは

一線を画し、国家の衰退・滅亡を招く愚行ではなかったのか。新自由主義の時代を超えて愛のある政治が求められている現状下、世界に類を見ない平和主義を貫く法治国家の臣民として我々語学教員がなすべきことは何か。マルクス研究者の小林栄三は「科学的社会主義の教育論」(1968年)¹² において「資本家とは総合的な学習を敵視する」、といった内容のことを述べている。なぜ、資本家はそのようなことをするのか。それは労働者を機械のような存在にしたいからである。資本家にとって危険な知識、余計な知識を労働者が手に入れては困るのである。これは一種の情報操作であり、もっと言えば知に関する「ファシズム」とさえ置き換えることができよう。我が国の政治が資本家のサーヴァントになったとは言わないが、少なくともアメリカが打ち出している「新自由主義」型資本主義に追随していることは確かなように思われる。これに教員も追随すべきなのか。あるいは大学自体がこのシステムの下位部門に入るべきなのか。教員は考えねばならない。

「教育改革」は必然的に一部の語学教員たちにこういったことを考えさせているだろう。確かに、それは一部かもしれない。多数派は嬉々としてコミュニケーション中心の「底の浅い」教育に拘泥しているのかもしれない。しかしまた、そういった多数派を見るにつけ、「文化から語学を教えたい」「よりよき教育をしたい」という少数派はモチベーションを奪われることになるだろう。我が国の語学教育は今や、(すべてとは言わないが) 学問の意義さえ認識できず、確かな研究のバック・グラウンドさえ保持していない外国人教員が跳梁跋扈する場とも化してしまった。有能な外国人研究者は西欧に流れ、生計を求めオリエントを享受しただけの学位も業績も怪しい外国人語学教員が我が国に溢れ出した。これに「授業で英語コミュニケーションを実施することだけが語学教育の至上である」「(限られた人数に対する単なるアンケート結果の統計にしか過ぎない英語教育なる1ジャンル名を研究専門分野と誤解し) 英語練習帳とでもいうべきテキストでもって英語教育研究を行なうことが顧客のニーズを満たす最たる手段である」と考える¹³ 西洋コンプレックスを抱いた日本人語学教員が結託し、大学語学教育の場はまるで伏魔殿へと変貌してしまった。「経済教育学」「理工教育学」なるものが他の分野に存在しない(または盛んでない)にも拘らず、語学分野だけがその隆盛を極めていく奇異さに文部科学省は目を瞑ったままなのか。「(表層という意味での) プラクティカル」を

求めるなら、数学は簡単な計算式と簿記のみを行なえばいい、国語は古典・漢文を除けばいい、日本史・世界史はとりやめればいい。しかし、現実はそのではない。学問の意義とは何か。なぜ語学分野のみ皮相な知識を与え続けなければならないのか。硬直した知識しか持たない語学学習者は時代が変わればその渦に巻き込まれてもいいのか。もう一度言う、「レストランの場所」や「友達の一週間の予定」の尋ね方などのトピックで最前線の語学教育を組み立て、それを英語で嬉々として実行する語学教員の資質を再度構築し直さなければならない。その受験者の出身のほとんどが日本と韓国である TOEIC を世界標準と考える語学教員の資質を再度構築し直さなければならない。夏期・春期の学究期間を休暇期間と捉え、やれパーティーだのやれ海外旅行だの、それがあたかも人生の至上目的であるが如くの西洋コンプレックスで安穩と日々を過ごす語学教員の資質を正さなければならない。真の意味での学問ができない語学教員の資質を再度構築し直さなければならない。そして、学問研究を自身の教育に反映させる両翼飛行ができるような語学教員の資質を再度構築し直さなければならない。国家を衰退・滅亡させるだけの低下した資質を排除し、教育の最高府である大学においてこそ研究者として教育者として「個」の在り方を見つめるべき転換点が今我々の目の前に存在している。大学に語学屋はいらない、政治屋はいらない、研究者を名乗る偽善者はいらない、学生をただただ利用して生計を立てるだけの愚行者もいない。日の本の唯一の資源が「人」であるからこそ、先人が築いた偉大なアカデミズムが日の昇る国にせしめたからこそ、今の日本がある。真の研究を知らず、真の教育を知らず、ただただ貪り食うだけで日本のアイデンティティーをも崩壊させるつもりなのか。このままでは我が国家はもたない。

国家政策とは国民を幸福にすることを目指すものではなかったか。政治とは国民を心身ともに豊かにするものではなかったか。しかし、この「構造改革」、「大学改革」、「FD」とは、少なくとも、我々教員の一部から、教育への使命感さえ奪っていくように見える…。こう思うのは、筆者だけだろうか。アメリカと日本における大半の大学の学費が年 1,000,000 円以上もするのに対し、（一部英国を除いた）欧州のそれが約 50,000 円前後であることも鑑みれば、そのシステム上の優劣及び人材の優劣の差異に伴い、我が国から優秀な人材の流出がますます起こり得るであろ

う。新自由主義の名の下、文部科学省から各大学への助成金がさらに減らされ（もしくは近い将来、0にされ）、各大学が独自の資金で奨学金制度も維持していかなければならないとするならば、銀行のような貸し渋りも生じ、裕福な者しか大学に行けなくなる昔のアメリカに退行する状況も現実化し得る。このような状況下では、決して裕福でなくとも意欲があり、真摯であり、素質がある学生の海外流出は歯止めが利かなくなってしまうであろう。少なくとも筆者はそのような学生を目線で常に研究と教育を行なっていきたいと自身を律するばかりである。長々と自身の想いを綴ったが、今や迷霧は晴れた。重要なことなので再度強調するが、当然のことながら、教育とは何を学ぶべきか、すなわちその「内容物」が問われるべきである。Reading でどのように学習者のモチベーションを上げるか、近年に学習すべき文法事項は如何に増減したのか、多読は有効か…といった研究はそれを彩る「容器」にしか過ぎない。いくら容器を豪華絢爛に飾りつけてもその内容物が伴わなければ、教員としての資質はスペイン語でいう 'blanco' の概念に帰してしまう。まさに、我々語学教員の資質が「白」の概念になってしまっただけでは、本来のFD理念の具現化は遠のくばかりである。各国の文化が最も顕著に反映される言語の概念を深く見つめることができる人材を育成し、人間という同じ生物として多様な文化の本質を互いに尊重し合えるような社会を築くためには如何なる語学教育が求められているのか。雲一つない青空をキャンバスとするが如く、自由に意思を描き、相手の意思をも自在に描き取るためには、「モノの見方」という筆を手にとらなければならない。虹は七色ではない、海は青くはない、しかしながら、それを描く筆には確実に人間のモノの捉え方が存在しているのだ。「真の意味での外国人とのコミュニケーション」を図るためにはまさにこうしたモノの捉え方のメカニズムを明らかにして活用する「言語力」が必要であり、言語に反映された様々な認識を理解してこそ、相手の価値観を享受し、同時にこちらの価値観も適切な概念でもって伝えることができるのである。前進させるためには研究と教育の両輪がリンクして回転すべきであり、ディシプリンでもって語学教育の真価が問われるべきである。我々は恐れてはならない、個の背景に踏み込んでこそ語学教育の真価が問われるべきであることを…。

‘SELF’ の概念とは自己を他者として見る視点を有する人間だけが持つものである。

自己意識とはヘーゲルの言うがごとく「自己を意識する意識」なのである。今、我々に求められているのはこのような「自己反省」「自己省察」の意識ではないか。「今、我々はこれでいいのか」と常に考えることこそ人間だけに与えられた知である。だからこそ、我々は進化・変転してきた。変転なき動物はやがては絶滅する。したがって、我々は人間としての「生」を続けるため、たとえ少数であるにしても、たとえモチベーションを剥奪する波に襲われようとも、自己省察を絶え間なくしてゆくだらう。まさに、こうした‘SELF’を持つべき者が「人間」たる所以であり、動物以下に成り下がらない「知」を有する研究教育者の礎であると言っても過言ではない。

注釈

1. (5 ページ目)

上記(2)に見られるように、「たまげる」とは「魂消る」、すなわち「魂が消える」ことである。「魂」が抜け出た後に残った肉体が「死体」だと見なされるならば、「魂が消える」ことは「死」を意味することになる。しかしながら、「たまげる」は「非常に驚く。びっくりする」(cf.『広辞苑』(s.v. たま・げる【魂消る】))の意であり、「死ぬ」の意を表すわけではない。これは一種の誇張表現であり、「魂が消える→死ぬほど驚く」から生じた表現であると考えられる。

2. (6 ページ目)

11世紀のペルシア（現在のイラン）の天文学者・数学者・哲学者であり、詩人であるオマル・ハイヤーム（Omar Khayyam）が詠み残した詩集。

3. (9 ページ目)

メタファーはある概念の一側面を際立たせるが、同時に他の側面を隠す性質を持っている (cf. Lakoff and Johnson (1980: 10-13))。

4. (11 ページ目)

筆者が「魂（[英語] soul / [スペイン語] alma）」と「精神（[英語] spirit / [スペイン語] espíritu）」との違いに関しキリスト教（オーソドックス）の信者を中心に現地調査を行なったところ、同様の回答が得られた。

5. (12 ページ目)

以下 [1] の記述参照。

[1] beside, alongside, abreast, abeam, by, on the flank of, along by, by the side of,
along the side of

— *RIT* (s.v. 218 *SIDE*, *PREPS* 11) (下線筆者)

6. (14 ページ目)

精神は肉体という容器の外にあまり離れずに存在していればよいのだから、逆に言えば、必ずしも接触状態であることは必要条件ではない。そのため、接触概念表示語 *on* もここでは使えないと言える。

7. (18 ページ目)

上記(24)に見られる *over* の捉え方は、下記 [1] の *over* と概念的に並行する。

[1] We chatted *over* a cup of coffee.

(私たちはコーヒーを飲みながらおしゃべりした)

8. (20 ページ目)

『ジーニアス英和大辞典』(s.v. *oneself*, 【成句】 *by oneself*) には、3つ目の意味として以下 [1] に示されるように、

[1] (3)ひとりでに

The clock stopped *by itself*. 時計は自然に止まった。

— 『ジーニアス英和大辞典』(s.v. *oneself*, 【成句】 *by oneself*)

「ひとりでに」という意味も掲載しているが、これは「(2) 独力で (*without help*)、ひとりで」と同様「他者の力に頼らず自分だけの力で」から生じた意味と考えられる。例えば、上出 [1] の例文は下記 [2] のように捉えればよい。

[2] その時計は他者の力に頼らず自分だけの力で止まった

→ その時計は外的な力を加えることなく止まった

→ その時計は $\left. \begin{array}{c} \text{ひとりでに} \\ \text{自然に} \end{array} \right\}$ 止まった

9. (20 ページ目)

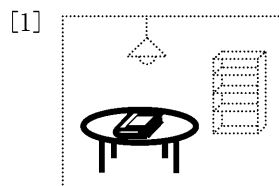
前置詞 *by* の中核義およびその派生義について詳しくは上野・森山・福森・李 (2006: 481-506) 参照。

10. (20 ページ目)

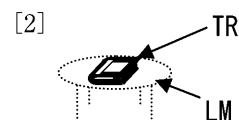
TR は「トラジェクター（[英語] trajector / [スペイン語] trayector）」を、また LM は「ランドマーク（[英語] landmark / [スペイン語] locus）」を表す。

事物を知覚・言語化する際により際立ちが大きく「図（[英語] figure / [スペイン語] figura）」として認識される部分を「プロファイル（[英語] profile / [スペイン語] perfil）」と言い、際立ちが小さく「地（[英語] ground / [スペイン語] fondo）」として認識されるものを「ベース（[英語] base / [スペイン語] base）」と言う。そして、プロファイルが更に事物と事物との間に成立している時、より際立ちが大きく「図」として認識されるものを「トラジェクター（TR）」と言い、際立ちが小さく「地」として認識されるものを「ランドマーク（LM）」と言う。例えば、「本が机の上に在る」ことを言う場合、我々は以下 [1] → [2] の順序でその事象を知覚・言語化する：

[1] 部屋に在る様々な物の中から「本」と「机」を「プロファイル」する（この時、その部屋自体や部屋の中に在る他のもの（例えば本棚やランプなど）が「ベース」に当たる）。右図 [1] で、太実線は「プロファイル」されたものを、点線は「ベース」を表す。



[2] プロファイルされた「本」と「机」のうち、際立ちが大きく「図」として認識される「本」が「トラジェクター（TR）」になり、「地」として認識される「机」が「ランドマーク（LM）」になる。右図 [2] で、太実線は「トラジェクター（TR）」を、点線は「ランドマーク（LM）」を表す。



11. (24 ページ目)

なお、ここで言及されている坂部恵 [1985] とは、以下 [1] の論文のことである。

[1] 坂部恵 (1985) 「かたりとしじま — ポイエシス論への一視角 — 」大森莊蔵 他 (編) 『新・岩波講座 哲学1 いま哲学とは』 pp. 213-239, 岩波書店.

12. (33 ページ目)

この論文は「日本共産党の教育政策とマルクス・レーニン主義の教育論」として『前

衛』(1968, 6・7月号)に掲載されていたものを「科学的社会主義の教育論」として日本共産党(編)『日本共産党と教育問題』(1980: 19-56, 新日本出版社.)に改題・再録されたものである。

13. (34 ページ目)

英語教育なるものを専門と名乗る大学語学教員であっても、程度の差こそあれ、この絶対悪に気づき出す／気づいている者も存在する。しかしながら、その中には自身の資質改善を図るところか、「応用言語学」という比較的新しい分野名に拠所を移し、自分は言語学者だと名乗り出す者が近年現れ出した。筆者が知る限り、そういった者に限って言語学の諸理論、諸言語学分野の存在意義に関する歴史的流れ等に精通していない。そればかりか、当該者が行っている内容といえは従来の英語教育のそれと何ら遜色なく、結局は皮相な硬直した内容ばかりを扱って研究者を名乗っている事態は看過できる問題ではない。応用言語学に(チョムスキー理論や認知科学に見られるような)独自の言語学理論が存在せず、他分野で「応用社会学」「(臨床心理学とは異なるという意味での)応用心理学」なるものが存在しない(もしくは盛んではない)ことがすべてを物語っているであろう。ここでは金銭代用の問題に言及しないが、日本にやって来た外国人語学教員が取得する学位(修士号, 博士号)の大半が英語教育か応用言語学という名の範疇に属することも何をか況やである。英語教育や応用言語学なるものがアメリカだけ盛んで(確かな学問観を有する)欧州で無名に近いのはなぜか、それは前者で資質が低下した教員が問題となり、あくまでも即効的な修正を余儀なくされているからである。アンケートを教員評価に反映させなければならない風潮がアメリカで強いのも同様のコンテキストで捉えなければならない。ピア・レビューも同様である。スペイン・ポルトガル・フランスを始めとした欧州を渡り歩き、圧倒的な資質を誇る教員陣を有する大学教育を目の当たりにしてきた筆者にとっては、各授業内の学習者によるアンケートの実施などは聞いたことがない。それどころか、日々の研鑽と確かな資質を有する当該研究者に同じことを行なえば、失礼の何物でもないと感じざるを得ない。FDという名のそうした懐疑的システムを日本にそのまま持ち込むということは、我々日本の大学語学教員の中に確かな研究実績を積まず、単なる語学屋が多数存在していることを認めることと等価である。筆者は自戒の念を込めて言っている。

（なお、参考文献は「図地分化と容器のメタファーに見る「自己」の概念研究 — 英語、スペイン語の異言語対照を中心に —」（その1）に記載。）